

2022 年 4 月

食料安全保障月報 (第 10 号)



令和 4 年 4 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 4 月食料安全保障月報（第 10 号）

目 次

概要編

I	2022 年 4 月の主な動き	1
II	2022 年 4 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 1 ウクライナの作付けと輸出動向	4
VI	今月の注目情報 2 ウクライナ情勢を受けた米国の作付動向	5
	（資料）	
1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	17
7	FAO 食料価格指数の推移	19

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 2021/22 年度の輸出量は過去 6 年で最低水準	
	＜カナダ＞ 2021/22 年度期末在庫は減産により過去最低の見通し	
	＜豪州＞ 2021/22 年度の実産量、輸出量は史上最高の見通し	
	＜EU27+英国＞ ウクライナ産とうもろこしの代替として飼料用小麦需要が増加	
	＜中国＞ 2021/22 年度の冬小麦の作柄は休眠期後に天候に恵まれ改善	
	＜ロシア＞ 輸出の継続から輸出量は 1.0 百万トン上方修正	
	＜ウクライナ＞ロシアの侵攻により穀物の播種面積は減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量史上第 2 位、エタノール用需要増、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 冬とうもろこしの作付面積拡大により、生産量史上最高の見通し	
	＜アルゼンチン＞高温・乾燥も、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し	
	＜ウクライナ＞侵攻による黒海の港閉鎖の影響等で輸出量 450 万トン下方修正	
3	コメ	15
	＜米国＞ カリフォルニア州の作付面積が 1983/84 年度以来の低水準に	
	＜インド＞ コメ相場が同国の小麦・とうもろこし相場を下回る	
	＜中国＞ コメの飼料向け需要が増加	
	＜タイ＞ アフリカ・中東向け輸出が好調により輸出量上方修正	

＜ベトナム＞冬春作の収穫が進展

II 油糧種子

大豆 · · · · · 2 1

＜米国＞ 生産量は史上最高も、輸出減の見通し

＜ブラジル＞南部の高温・乾燥で単収下方修正、生産量は減産見通し

＜アルゼンチン＞高温・乾燥で生産量は減産見通し、輸出税は継続

＜中国＞ 減産見通し、消費量・輸入量は下方修正

＜カナダ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し

特別分析トピック

米国、EU、中国の農業政策の概要

【利用上の注意】

表紙写真：

ウクライナのトラクターと播種用トラクター機械（4月4日撮影）

(概要編)

I 2022 年 4 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定したが、収穫が行われている南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、4 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、生産量は史上最高となるものの、ロシアのウクライナ侵攻に関連し、ウクライナの小麦輸出量が下方修正されたこともあり、国際相場は過去最高を更新する等、高い水準の中で不安定な動きで推移しており、今後も注視が必要。

一方、とうもろこしについては、ウクライナの輸出量が下方修正されたこと、大豆については、南米の乾燥の影響で、生産量が 4 か月連続で下方修正されたことで、いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：3 月）については、主に穀物（145→170）、植物油（202→249）及び肉類（114→120）が上昇した影響により、2 月より上昇（141→159）し、1990 年以来過去最高となった。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降は下落傾向で推移した後、直近では上昇傾向。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、4 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 ウクライナの春作物の作付状況

ウクライナ農業政策省の4月1日の予測によれば、2022/23年度の冬作物は770万ヘクタールの作付けがされており、そのうち650万ヘクタールは冬小麦である。また、春播き作物の作付予定面積は、ロシアによる侵攻の影響もあり、同省の21日見通しでは前年度より17%減の1,404万ヘクタールの見通し。作付けは予定面積の7割程度進展している。

同省の15日のプレスによれば、国内の穀物需要は年間500から700万トンで国内需要は満たし、輸出も可能であり、3月時点よりは状況は改善しているとしている。

ゼレンスキー大統領によれば、穀物倉庫が破壊されており、その他農業インフラにも被害が出ており、穀物の保管や輸出に支障が出ているとしている。また、肥料や農薬など農業資材が不足しており、今後収穫される2022/23年度産の単収にも影響するといわれている。

一方、現地における農業インフラ被害状況やその作付けの影響については様々な情報がある。例えば、ヴィソツキー農業政策食料次官は4/14の現地メディアにおいて、穀物エレベーターで破壊されたのは全体の2~3%と述べている。また、同次官は播種面積においても、穀倉地帯で地雷が全面的に除去できれば80%まで可能と述べている。

2 ブラジルの大豆生産量は下方修正もとうもろこし生産量は上方修正

ブラジルの食料供給公社（CONAB）は4月7日の穀物レポートで、2021/22年度の穀物(大豆等油糧種子含む)の作付面積は、前年度(69.0百万ヘクタール)より4.4%増の72.9百万ヘクタール。生産量見通しは、前年度より5.4%、1,380万トン増の2億6,930万トンに上方修正された(3月予測2億6,570万トン)。

収穫が終盤を迎えている大豆の生産量は、南部の乾燥により3月見通しより0.4百万トン下方修正され、1億2,240百万トン(対前年度比11.4%減)。

一方、収穫期を迎えた夏とうもろこしの生産量は60百万トン上方修正され2,490万トンで対前年度比でわずかに増加。大豆収穫後に作付され、生育期を迎えた冬とうもろこしは生産量は270万トン上方修正され、9,070百万トンとなり、干ばつや霜害の被害のあった前年度より大幅増の見通し。とうもろこし計で1億1,560万トン(対前年度比32.7%増)で史上最高の見通し。

3 インドのコメ・小麦生産・輸出史上最高

USDAによれば2021/22年産のインドのコメ・小麦の生産量は、天候に恵まれ、6年連続増産でコメ1億2,900万トン、小麦1億959万トンで史上最高の見通し。

コメの輸出については、豊富な供給余力を背景に、他のアジア諸国と比較して価格競争力があるため、年々輸出量を増加させ、2021/22年度は史上最高の2,100万トンとなる見通し。世界のコメ貿易の4割のシェアを占めている。本年2月以降、小麦の価格がコメの価格を上回り、飼料穀物の価格も高騰していることから、中国やベトナムなどが安価なインド産の碎米を飼料向けに輸入するケースも見られる。

小麦の輸出についても、増産に伴い輸出量は850万トンと史上最高の見通し。2月以降、ウクライナ情勢の緊迫化に伴い、エジプトなど従来ロシアやウクライナから輸入していた国がインド産の手当てを進めている。

Ⅱ 2022 年 4 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、3 月末、360 ドル/トン台後半で推移。4 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻による世界的な小麦の供給混乱の懸念や、冬小麦の主産地の米国プレーンズの乾燥による作柄への影響懸念等から 410 ドル/トン台前半まで上昇したものの、米国の低調な輸出需要等から値を下げ、4 月下旬現在、390 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、3 月末、290 ドル/トン台半ばで推移。4 月に入り、3 月末発表の USDA 作付意向面積調査で市場予想を下回ったことや米国中西部の低温多湿による作付けの遅れ、ロシアのウクライナ侵攻の深刻化、原油価格の高止まり等から値を上げ、4 月下旬現在、310 ドル/トン台前半で推移。

コメは、3 月末、440 ドル/トン台前半で推移。バーツ安の一方、サブサハラアフリカの需要増により相殺され、ほぼ横ばいで推移し、4 月下旬現在も 440 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、3 月末、590 ドル/トン台半ばで推移。4 月に入り、3 月末発表の USDA 作付意向面積調査で市場予想を上回り、史上最高の作付予想となったことなどから一時値を下げる場面はあったものの、ラニーニャ現象に伴うブラジルの高温・乾燥による減産や米国の輸出が中国向けを中心に好調なペースを維持していること、ロシアのウクライナ侵攻の深刻化やインドネシアのパーム油の輸出規制等による植物油価格全体の上昇等から値を上げ、4 月下旬現在、630 ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 190 万トン上方修正され 27.9 億トン。消費量は、前月から 300 万トン上方修正され 27.9 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.5% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、穀物全体で上方修正され 27.9 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され 27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、5.0 億トンの見込み。

期末在庫量は、8.0 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は前月から下方修正された。

(注：数値は 4 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を下回り 6.0 億トン。消費量は前年度を上回り 6.1 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、17.5 となる見込み。

(注：数値は 4 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報 1：ウクライナの作付けと輸出動向

2月24日にロシアのウクライナ侵攻が始まったが、4月に入っても侵攻が続いている。ウクライナの穀物等の作付けや輸出については大きく影響を受けるとみられている。現時点の状況をまとめた。

1 2022/23 年度の作付状況

ウクライナの春の作付けについては、ロシアの侵略の影響もあり、ウクライナ農業政策省の4月1日の報告によれば、春播き作物の作付予定面積の合計は、対前年比約3.3百万ヘクタール減の13.7百万haとであった。しかし、4月7日時点の作付けは、春小麦が11.4万ヘクタール、とうもろこしは1.4万ヘクタールで前年を大幅に上回るペースで作業が進んだ。

4月21日時点の同省の報告では、春作物のおおむね7割の作付けが終了し、作付予定面積も対前年度比2.5百万ヘクタール減の14.4百万ヘクタールに上方修正された。

なお、春の作付けに関する戦争の影響として、戦況の長期化による農地も含めた多くの土地での地雷敷設、港湾の閉鎖や輸送インフラの破壊による物流の混乱、営農に必要な資金や、種子、肥料、燃料などの資材の調達が困難となっていることが挙げられる。一方、現地における農業インフラ被害状況やその作付けの影響については様々な情報がある。例えば、ヴィソツキー農業政策食料次官は4/14の現地メディアにおいて、穀物エレベーターで破壊されたのは全体の2~3%と述べている。また、同次官は播種面積においても、悪くても予定面積の70%は達成できる見込みであり、穀倉地帯で地雷が全面的に除去できれば80%まで可能と述べている。

なお、前年作付けされた冬作物は7.7百万ヘクタール作付済み。うち、小麦は6.5百万ヘクタール、大麦1.0百万ヘクタール、ライ麦0.2百万ヘクタールとなっている。

2 穀物の輸出状況

ウクライナの穀物については、同省によれば、2021/22年度は小麦やとうもろこしなどの穀物、ひまわりなどの油糧種子合計で1億600万トンの史上最高の豊作となった。しかし、本年2月以降の輸出については、ロシアの侵攻により従来の黒海沿いのオデッサ港やミコライエフ港からの輸出ができないため、3月以降、鉄道経由で他のEU諸国へ運び輸出を試みているが、ウクライナとEUの間の鉄道の軌道幅が異なるなど、輸出能力には限界がある状況となっている。

USDA(米国農務省)によれば、2021/22年度の小麦の輸出見通しについては、戦争以前の2月時点の2,400万トンから3~4月で計500万トン(約20%)下方修正され1,900万トンの見通し。また、同年度とうもろこしについては、2月時点の3,350万トンから1,050万トン(約30%)下方修正され2,300万トンとなる見通し。このうち1,700万トンはすでに2月までに輸出されているとみられる。

ウクライナ政府は、ロシアの侵攻を受け、小麦やとうもろこしについては輸出許可制を導入したが、とうもろこしについては、その後解除された。

(小麦・とうもろこしについては品目別需給編を参照)

Ⅵ 今月の注目情報 2：ウクライナ情勢を受けた米国の作付動向

3月31日に米国の作付意向調査結果が公表され、3月に価格が史上最高値を更新した小麦の面積は増加、大豆の面積も増加し史上最高となった。一方、肥料価格の高騰を受け、とうもろこしの面積は減少となった。ロシアのウクライナ攻撃が継続し、穀物価格が不安定な動きを見せる中、米国の作付け、貿易状況についてまとめた

1 米国の作付意向調査結果

3月に行われた米国の作付意向調査で、ロシアのウクライナ侵攻の中、3月7日には、シカゴ相場が史上最高値をつけた小麦については作付面積が増加した。また、大豆も増加したが、とうもろこしは減少し、4年ぶりに大豆に抜かれた。

(1) 小麦

小麦については、前年度より1.4%増の1,916万ヘクタールとなった。しかし、1919年の調査開始以来5番目に低い水準となっている。内訳をみると、デュラム小麦は需給の逼迫感なども背景にあり17%増加し77万ヘクタールとなったものの、その他の春小麦は2%減の453万ヘクタールとなった。また、冬小麦は1月時点の見通しが下方修正されたが、2%増の1,385万ヘクタールとなった。

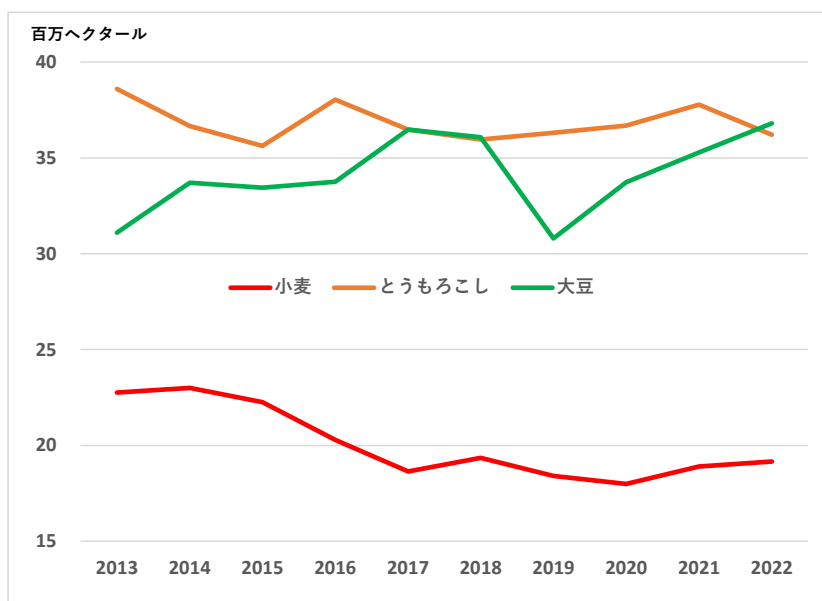
(2) 大豆

大豆については、前年度より4.3%増で史上最高の3,681万ヘクタールとなった。大豆はとうもろこしと比べて肥料投入量が少ないことや、ブラジルをはじめとする南米の大豆生産量の見通しがラニーニャ現象による高温・乾燥の影響で大きく下方修正されたことが背景にあるとみられる。市場予想を上回り、大豆相場も一時下落した。

(3) とうもろこし

一方、大豆や小麦と比べて肥料投入量が多いといわれるとうもろこしについては、肥料価格の高騰により投入コスト増の懸念から前年産より4.1%減の3,622万ヘクタールとなり、大豆に抜かれた。市場予想を下回り、とうもろこし相場は上昇した。

図1 米国の過去10年のとうもろこし、大豆、小麦の作付面積（2022年は意向調査）の推移



出典：米国農務省 作付意向調査

表1：2022年の作付意向調査結果

品目	2020	2021	2022	対前年比
大豆	3,373	3,529	3,681	▲ 4.3
とうもろこし	3,669	3,778	3,622	▲ 4.1
小麦	1,799	1,890	1,916	▲ 1.4
冬小麦	1,232	1,362	1,385	▲ 1.7
その他春小麦	498	462	453	▲ 1.9
デュラム	68	66	77	▲ 17.1
綿花	489	454	495	▲ 9.0
コメ	134	102	99	▲ 3.2
長粒種	94	80	79	▲ 1.4
中粒種	27	21	20	▲ 8.2
短粒種	2	1	1	▲ 27.8
菜種	74	87	87	0.3

肥料価格の高騰前の調査であるが、USDA の 2020 年の生産費調査では 1 エーカー (0.4047 ヘクタール) 当たりの肥料投入コストを比較すると、とうもろこしは 117 ドルで大豆の 3.7 倍、小麦の 2.7 倍となっている。

表 2：生産費における肥料コストの比較 (2020 年)

	(ドル エーカー当たり)		
	大豆	小麦	とうもろこし
種子	59.51	14.52	91.83
肥料	31.34	44.00	116.91
農薬	35.61	15.84	32.62
燃料・電力	13.53	10.52	27.18
その他	42.26	40.48	59.47
資材コスト計	182.25	125.36	328.01

(4) その他品目

コメについては、作付面積は全体で 3.2%減の 99 万ヘクタール 出典：米国農務省 生産費調査 となった。長粒種の栽培が中心となっているミシシッピ川下流のデルタ地域では、肥料などの投入資材の価格が高く、価格が高水準で推移しているとうもろこし、大豆などの収益性が良いため前年度より 1.4%減少した。また、中・短粒種の栽培が中心のカリフォルニアでは 2 年連続の甚大な干ばつとなっており、前年度より約 15%減少した。その他、主に南部で作付けされる綿花は、他の作物と比べて相対的に価格が高いため、作付面積が対前年度比 9%増の 495 万ヘクタールとなった。また、菜種についてはわずかに増加している。背景には油糧種子の価格高騰があるとみられる。

2 作付進捗状況

4 月 18 日時点の作付け進捗状況は、米国のそれぞれ主要生産州で、春小麦 8% (過去 5 年平均 9%)、とうもろこしが 4% (同 6%)、大豆が 1% (同 2%)と、初期段階であるが。過去 5 年平均より遅れている。米国北西部の乾燥や中西部コーンベルトにおける低温多湿などが作付け遅れの要因とみられる。

また、冬小麦に関しては、4 月 18 日時点で、出穂率が 9%で過去 5 年平均より遅れている。生育状況に関しては 乾燥の影響もあるとみられ、良からやや良の比率が 60%で、前年同期の 76%を下回っている。

3 輸出状況

(1) 小麦

2021/22 年度の小麦に関しては、ウクライナ情勢を受けて、ウクライナ産の輸出見通しは、2 月見通しの 2,400 万トンから 3 月 400 万トン、4 月 100 万トンで合計 500 万トン下方修正された。しかし、米国産の輸出に関しても 4 月見通しでは 40 万トン下方修正され、前年度比 21%減の 2,136 万トンとなる見通し。USDA によれば、米国産の小麦の価格が他の輸出国と比較しても高いことが要因とされている。4 月のエジプトの貿易公社 GASC の輸入入札においても、米国産小麦は応札したものの、価格が高く、落札できなかったと報道されている。

(2) 大豆

大豆に関しては、南米の高温乾燥によるブラジル産をはじめとする大豆生産量の下方修正から、米国産への引き合いが強くなり、4 月見通しでは 70 万トン上方修正されたが、前年度比 6.4%減の 5,756 万トンの見通し。

(3) とうもろこし

とうもろこしに関しては、米国の輸出に関しては、3 月見通しから変更なく、対前年度比 9.2%減の 6,350 万トンの見通し。なお、USDA によれば、ウクライナ産とうもろこしの

2021/22 年度の輸出量については、2 月見通しの 3,350 万トンから 3 月 600 万トン、4 月 450 万トンで合計 1,050 万トン下方修正された。主にウクライナ産を輸入しているのは中国で年間 800 万トンを超えるが、ウクライナからの輸入減を他の輸出国が完全に代替することは現時点では困難として、中国の輸入量を 2,600 万トンから 2,300 万トンに下方修正した。

4 国際穀物貿易の動向

4 月の見通しでは、米国の 2021/22 年度の期末在庫率はとうもろこし、大豆は豊作にもかかわらずそれぞれ 2 年連続で 1 ケタ台の 9.6%、5.8%と低水準である。また、小麦についても 4 年連続で低下しており、特に 2021/22 年産の減産もあり、35.5%と前年度末より 4.5 ポイント低下する見通しとなっている。

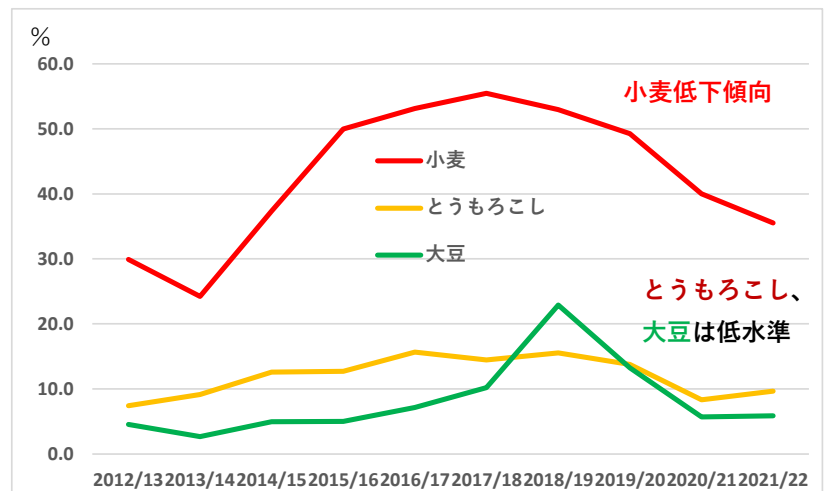
ところで、ウクライナの穀物の輸出については、ロシアの侵攻により、小麦の 2021/22 年度の輸出見通しについては 3~4 月で計 500 万トン下方修正。とうもろこしについては同様に 1,050 万トン下方修正される見通し。

ロシアのウクライナ侵攻に伴い、穀物相場が上昇したことから、インドは史上最高の生産量 1 億 960 万トンとなった小麦の輸出に力を入れている。USDA によれば、2021/22 年度のインドの小麦輸出量は、対前年度比 590 万トン増の 850 万トンの見通し。

また、ブラジル産とうもろこしについては、大豆収穫後に作付けされた冬とうもろこしの作付面積が増加し、2021/22 年度は史上最高の 1 億 1,600 万トン、輸出量も対前年度比 2,300 万トン増の 4,400 万トンの見通し。

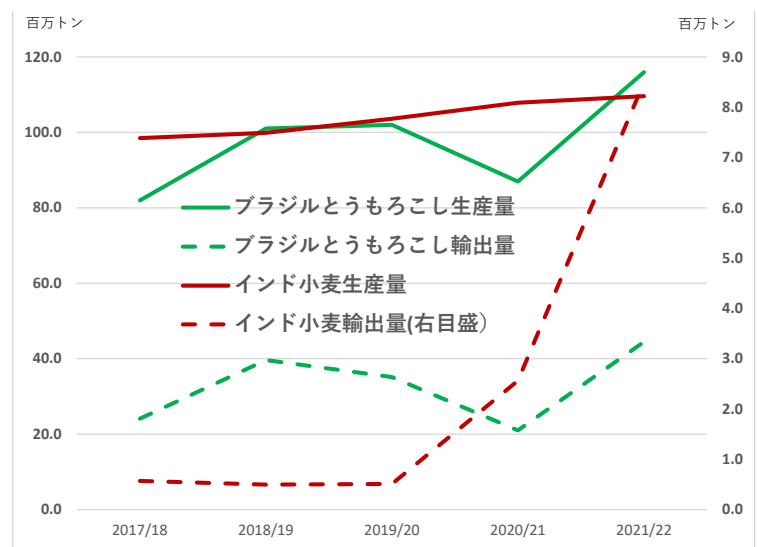
このような状況から、中近東諸国などのウクライナ産の代替の需要に関して、当面、小麦は史上最高の豊作となったインド産、とうもろこしについては同様に史上最高が見込まれるブラジル産に集中するとみられる。一方、米国のとうもろこしや小麦については、期末在庫率が低水準となっていることもあり、輸出量は 4 月見通しで上方修正されなかった。ウクライナ産の代替の穀物需要に関してどのような動きがあるかも含め注視していく。

図 2 米国の過去 10 年間の期末在庫率の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022 年 4 月)をもとに農林水産省で加工

図 3 ブラジルのとうもろこし、インドの小麦輸出の推移



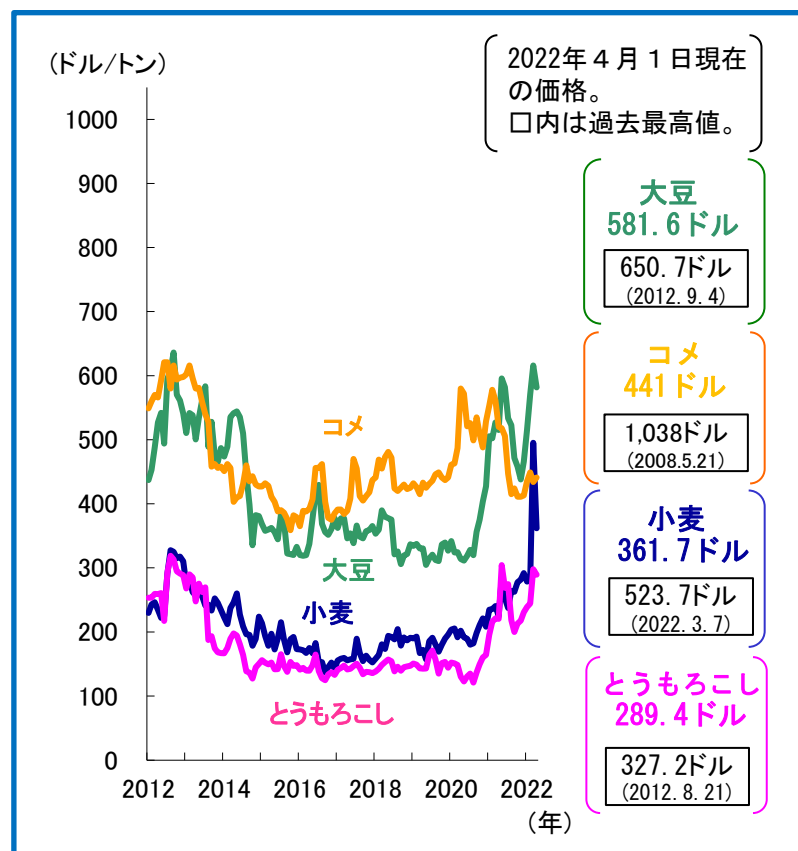
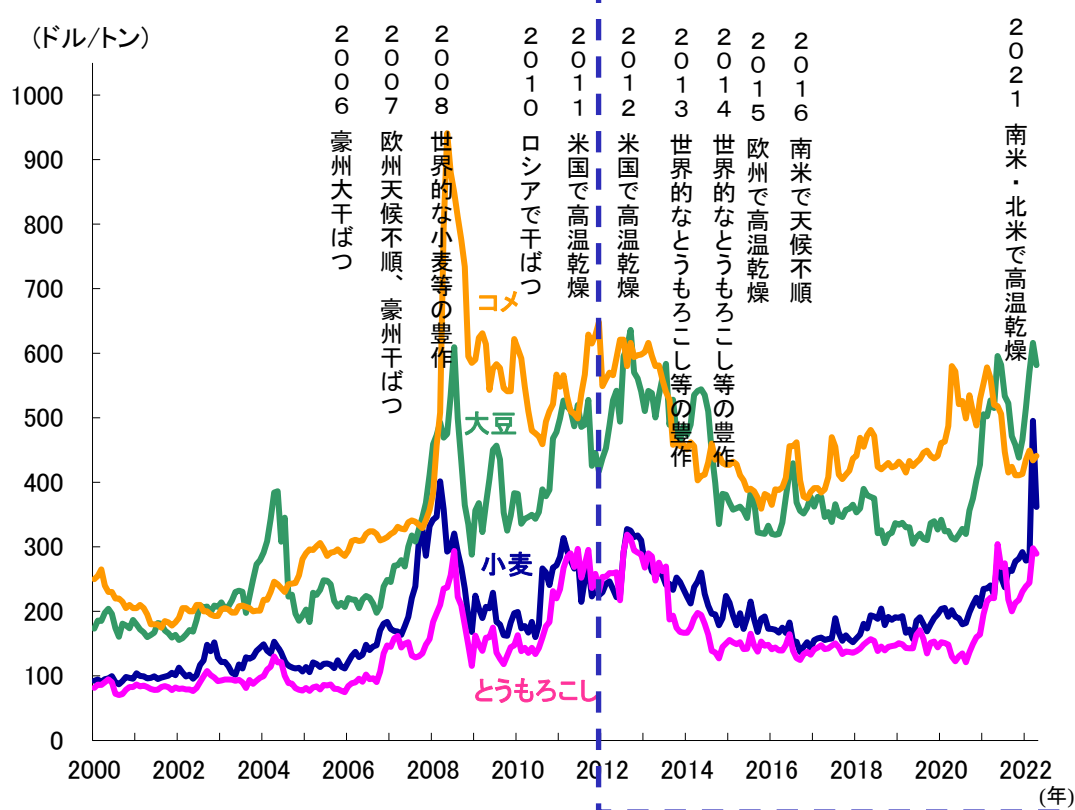
出典：米国農務省 「PS&D」(2022 年 4 月)をもとに農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇し、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



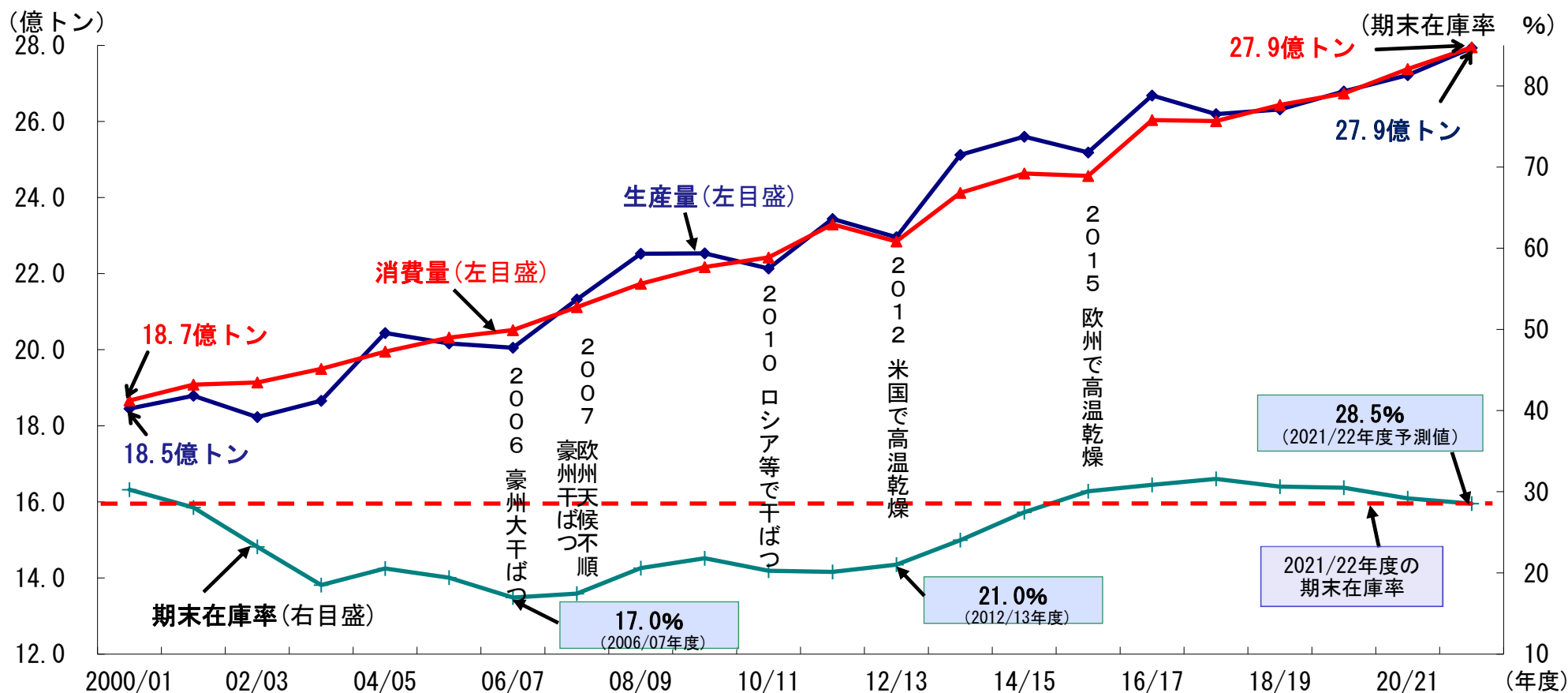
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの直近の価格は2022年3月30日現在の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

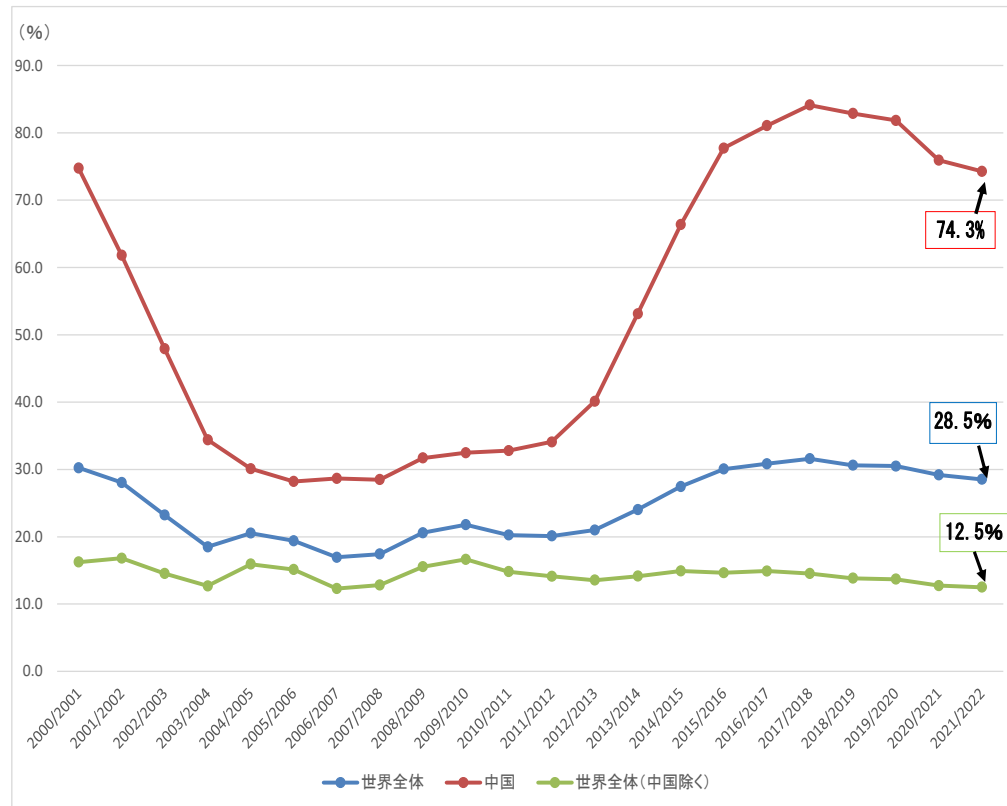


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(April 2022)、「PS&D」

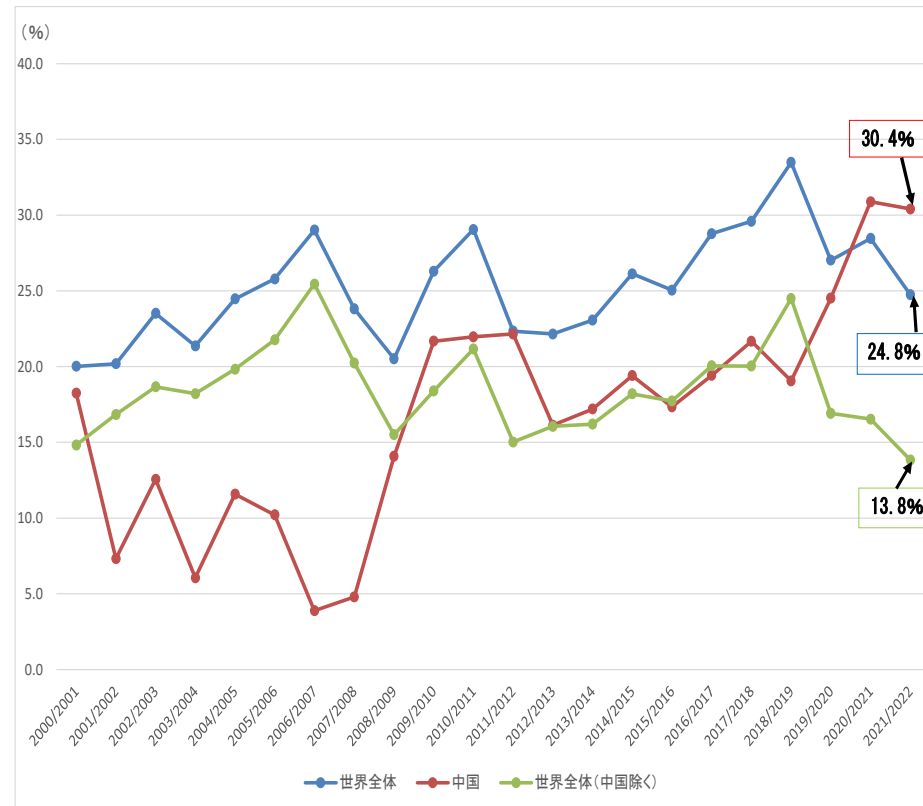
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 8, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

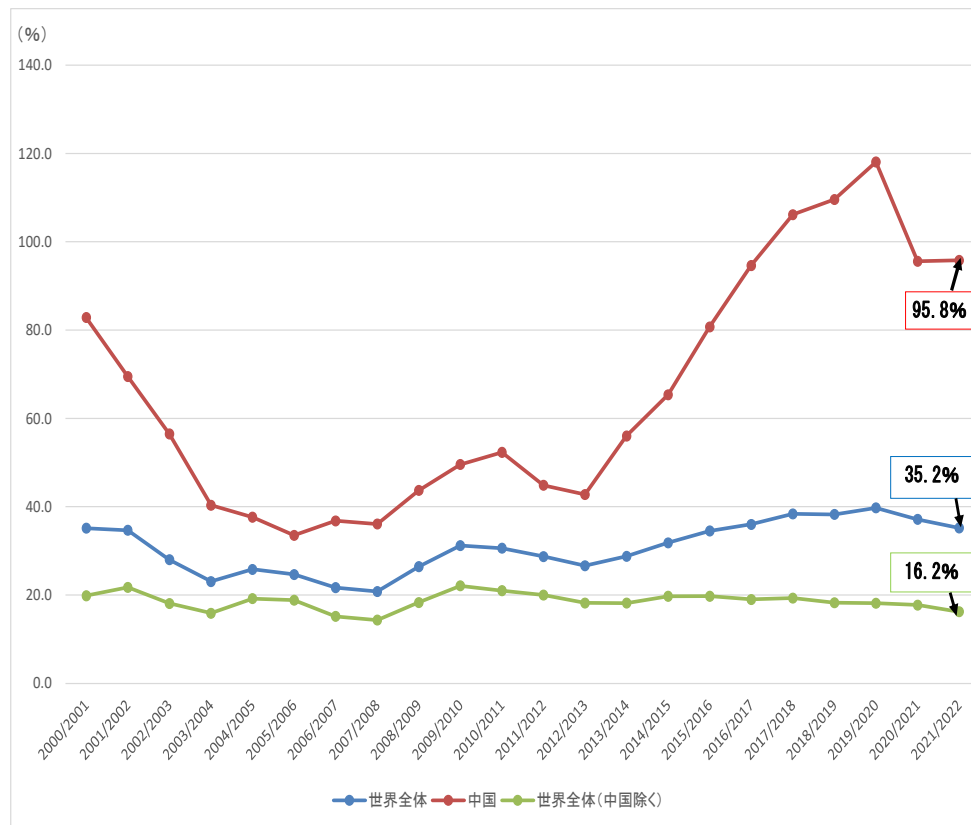
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

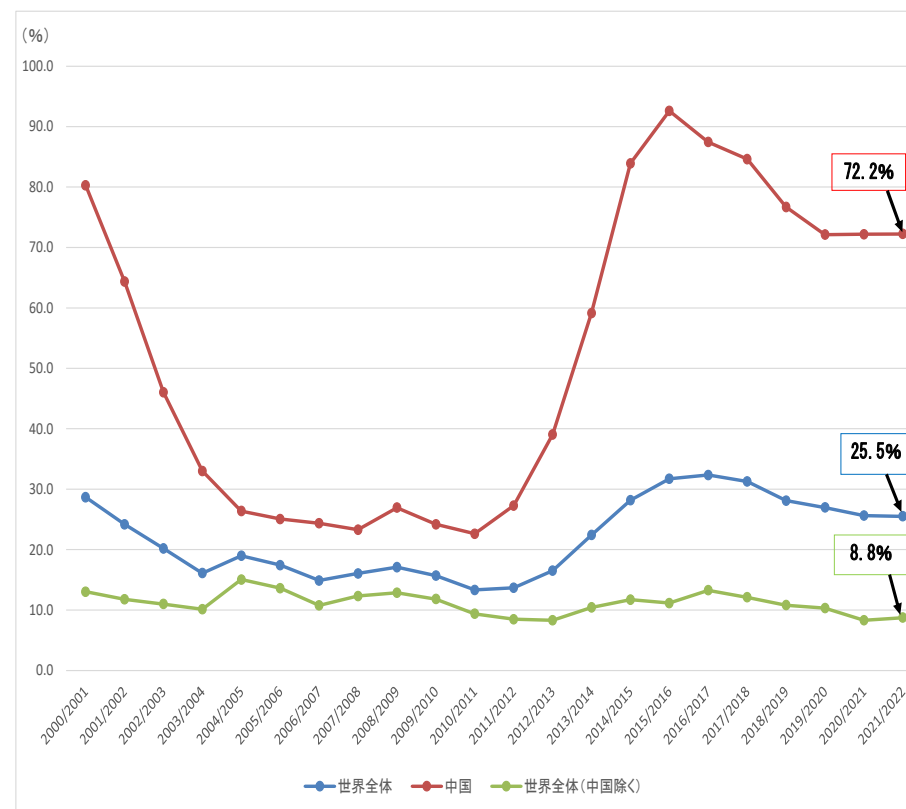
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 8, 2022)

注: 1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

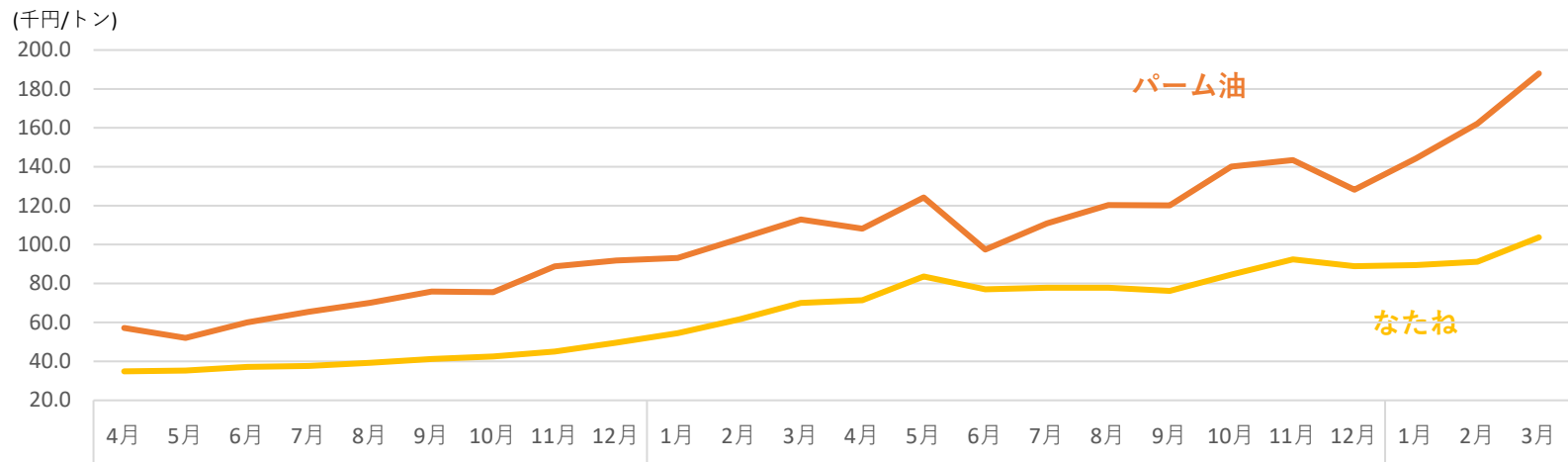
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

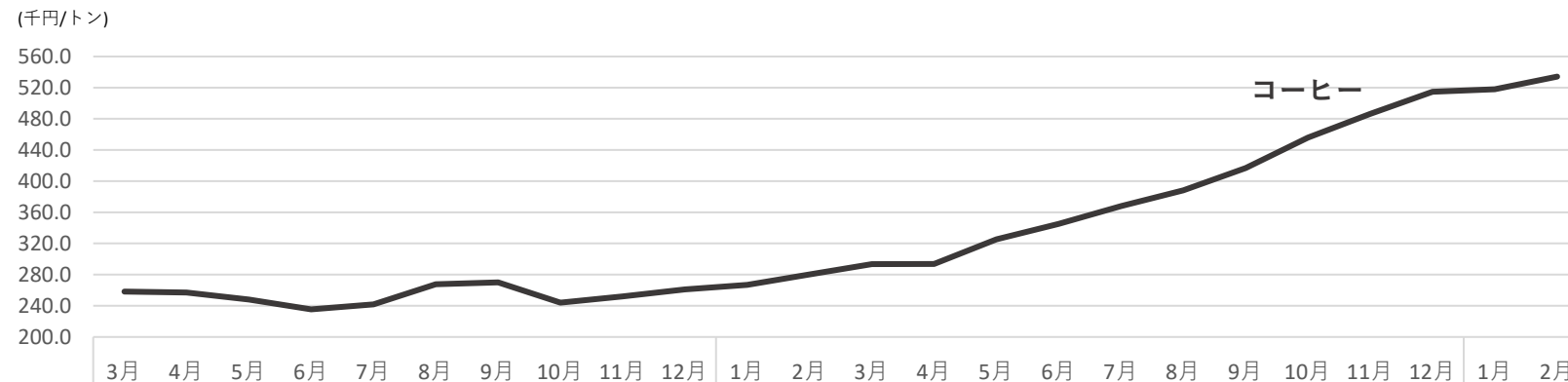
- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。



2022年4月20日現在
□内は2020年3月以降
の最高値。

パーム油
188.0千円/トン
188.0千円/トン
(2022.3)

なたね
103.7千円/トン
103.7千円/トン
(2022.3)



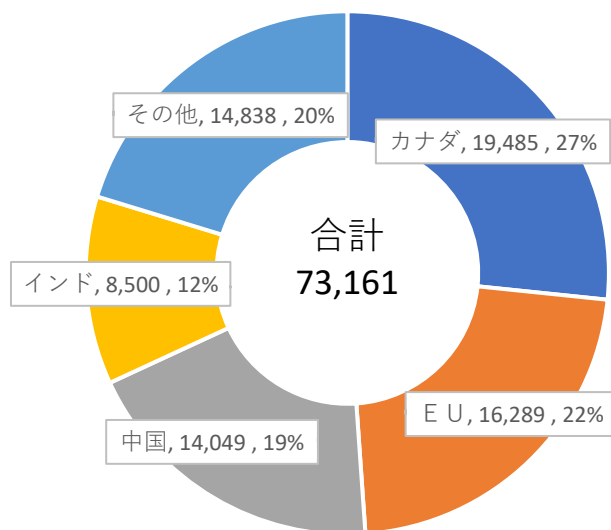
コーヒー
534.1千円/トン
534.1千円/トン
(2022.2)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

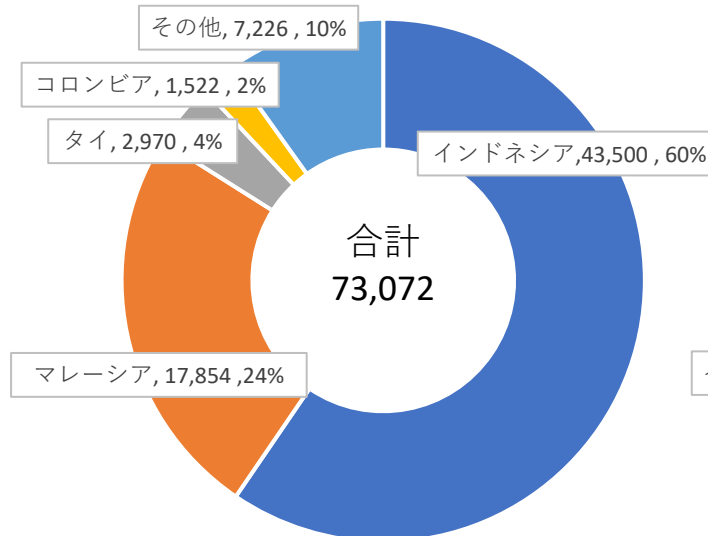
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



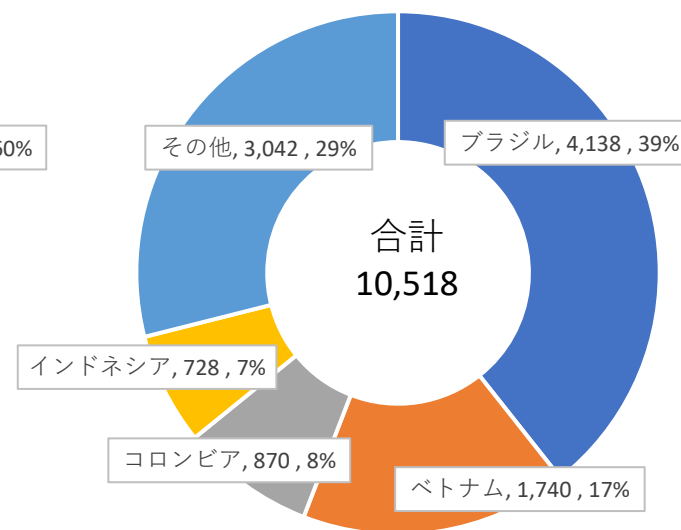
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年	
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
コーヒー	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1
前月比	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1
前年同月比	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年3月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.3～132.2(前年同月比で－0.2%～34.7%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和3年10月～令和4年3月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3			R4			
品目	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	99.6	99.7	100.0	103.2	107.1	107.2	8.6%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.9	101.0	98.5	100.4	100.9	100.9	0.8%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.0	102.6	102.5	102.3	102.1	102.9	1.9%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	118.1	120.5	121.6	124.6	128.4	132.2	34.7%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.2	99.6	97.6	98.3	99.0	99.9	－0.2%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.4	112.5	112.0	112.3	113.3	120.3	19.7%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	98.4	95.9	95.3	98.5	100.2	99.3	－0.2%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.8	99.9	99.7	99.9	99.7	0.0%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	100.7	101.0	100.9	101.2	101.5	101.9	2.0%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省) (令和3年10月～令和4年4月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3			R4				上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
品目	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.6	98.2	98.4	102.1	105.3	104.6	105.1	0.5%	6.6%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	99.0	97.8	98.4	98.4	99.0	99.0	0.0%	－0.6%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	100.7	101.1	100.7	101.6	101.1	102.0	101.6	－0.4%	3.1%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	112.8	115.3	116.3	119.1	122.9	126.4	129.6	2.5%	31.2%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.4	98.8	97.5	97.7	98.1	98.4	99.0	0.6%	0.6%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	106.6	106.6	105.6	105.9	105.9	112.1	117.2	4.5%	20.0%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	98.6	93.6	92.1	98.6	98.6	98.6	105.0	6.5%	6.0%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.9	99.7	99.7	99.7	99.7	99.7	99.3	－0.4%	－0.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日に海外の畜産物の需給動向を公表
（月報 畜産の情報）

○2022年5月号（4月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）堅調な需要により卸売価格は高水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002145.html

（カナダ）干ばつの継続により牛飼養頭数の減少続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002155.html

（豪州）洪水による影響で牛肉輸出量は依然低迷

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002156.html

（ウルグアイ）2021年の牛肉輸出量、生産量の回復を背景に増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002157.html

◆豚肉

（EU）スペインの豚肉生産量、ドイツを抜いてEU最大に

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002158.html

◆鶏肉

（タイ）2022年に入り鶏肉価格は高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002159.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価は過去最高水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002160.html

（EU）生乳取引価格、12カ月連続で前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002161.html

（NZ）生乳生産量は低迷も、旺盛な乳製品需要は継続

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002162.html

（中国）21年の生乳生産量と乳製品輸入量はともに増加、乳価も高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002163.html

◆飼料穀物

（世界）アルゼンチンなどで単収減も、世界のトウモロコシ生産量は引き続き過去最高の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002164.html

（世界）南米での大豆減産見通しで、輸出と期末在庫は引き続き下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002165.html

（米国）国内消費量と輸出量の上方修正によりトウモロコシの期末在庫は9%台に

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002166.html

（ブラジル）2021/22年度大豆生産量は前年度をかなり大きく下回る見込み

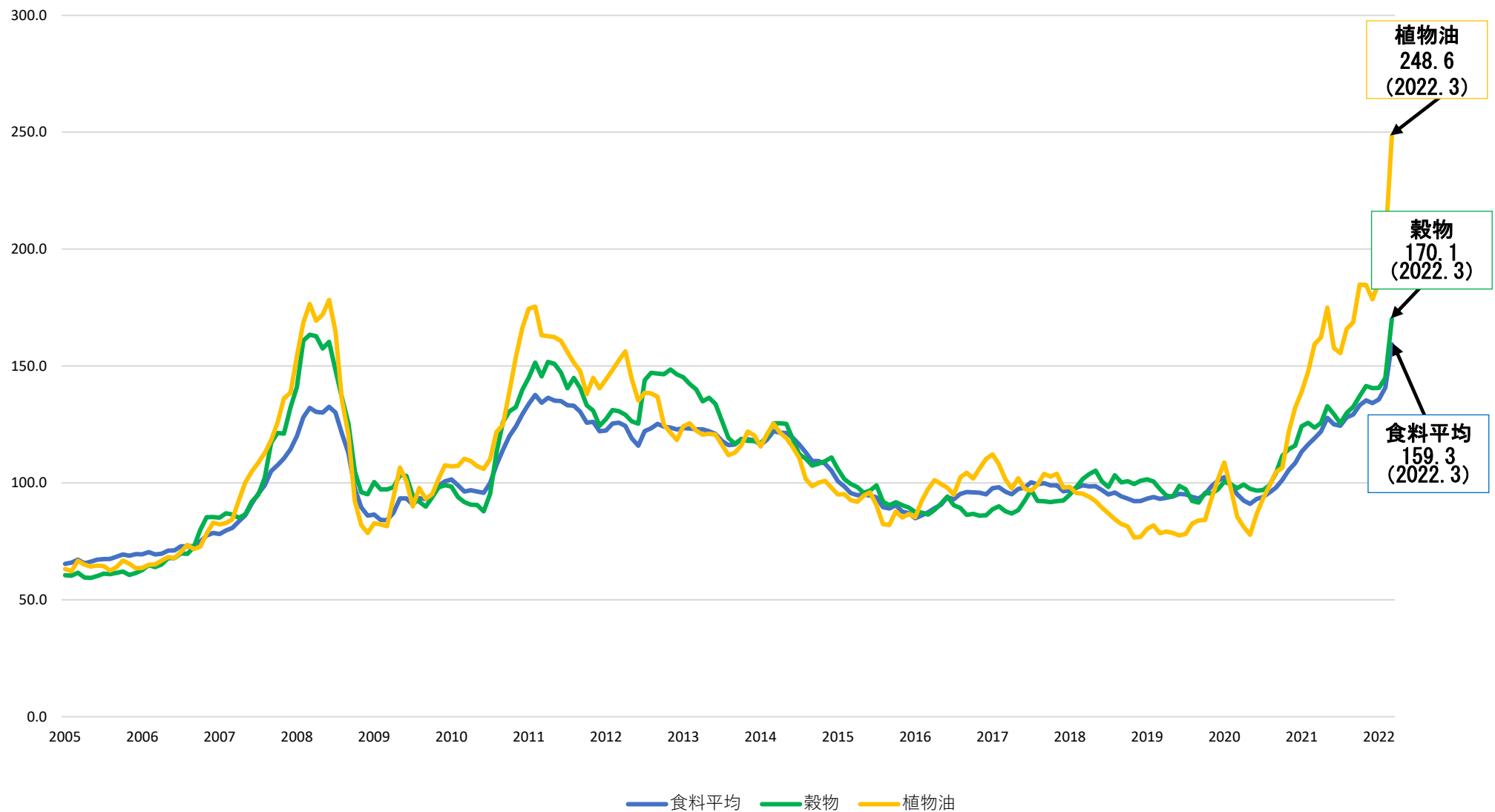
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002167.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向ほか

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002168.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.4)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等